



MA日本キックボクシング連盟  
CONBAT-2000 王道  
7月20日●東京・後楽園ホール

キックボクサーにとって、モチベーションを保てるかどうかは重要な問題だ。長い人生、いい時もあれば、悪い時もある。ケガのせいで精神的に腐る期間も一度や二度は必ずあるだろう。  
マッチメイクも大きな意味を持つ。せっかく試合が組まれても、あまりにも実力がかけ離れた相手

○バンナリン戦(7・2受観)で両足を負傷。満足に振ることが出来る状態ではなかったが、チャンスと見るや、伊藤は得意のミドルを打ち込んでいく



○個室では小比類拳賞と談笑する場面も。「小比類拳賞はいい選手になってきましたね。彼のためにも、僕がどんどん道を切り開いてあげたい」  
○パワフルな右ストレートを持っていたホー。伊藤をヒヤリとさせる場面もあった



○伊藤のヒザ蹴りによって、右スネに裂傷を負ったホーは、試合後、すぐにリングドクターの治療を受けた。粗削りながら、なかなかのファイター。韓国格闘技連盟認定のウェルター級王者の肩書は伊藤ではなかった  
○ホーの動きを止めるのに効果的だった伊藤のロー。時間が経つにつれ、試合の主導権を握っていった



との対戦になると、気持ちが悪えてしまう。ある一定の期間で何らかのゴールを与えられたらベストだが、必ずしも満足のいくマッチメイクが与えられるわけではない。今回ホー・ジェオンとの対戦が決まった時、私は伊藤のモチベーションの低下を案じた。最近こそ実力派のコリアンファイターが増える傾向にあるが、数年前まではがませ犬のイメージを拭うことができなかったからだ。  
だがそれは杞憂に終わる。精悍な表情で我々の前に姿を現したホーは我々の想像を遙かに上回るハードパンチャーだったからだ。序盤からタイミングのいい右で、スロースタートの伊藤にプレッシャーをかけていく。

なったバンナリン戦で両足と拳を負傷。けつして満足のいくコンディションではなかった。打ちたくても、連打できない。そんな感じだったから、序盤は様子を見ていくしかなかったのだ。  
とはいえパンチャや蹴りがダメでも、伊藤にはヒジがある。2Rになると必要最小限度のミドルや前蹴りでリズムを掴み、ホーをヒジで威嚇し始める。この韓国人はかなり伊藤のヒジ対策を頭に入れてきたようだったが、想像以上にシヤープだったため、タイミングを盗むことができなかったのだらう。3Rに入ると、試合は完全に伊藤のペース。最後は伊藤の猛攻に悲鳴を上げるかのように背を向けたホーにハイを決め、引導を渡し

た。控室へ戻ると、伊藤は11月に開催が予定されているK-1中量級の日本対世界に立候補すると宣言した。「相手はデニー・ビルでもサツグモンコンでも誰でもいい。これまでの実績からいって、自分がやるのが妥当でしょう」  
手負いの状態であっても、対戦相手が無名の韓国人戦士であっても、テンションを下げずにKO勝ちできた理由がこれでわかった。センチアンノイ戦を前半最大の山とするならば、後半のそれはK-1だったのだ。  
会場は東京体育館。リングは一般マスコミへの露出度も高いK-1。しかも対戦相手は世界屈指の強豪。お膳立ては整った。伊藤のモチベーションはK-1によって支えられている。  
(布施)

○第8試合(56・契約)無敗同士のファイティング前沢(右・土浦)と高橋拓也(習志野)の対戦。2R、前沢が右バックブローを決めダウンを奪うと、飛びヒザ蹴り等でラッシュ。高橋もパンチの連打で反撃するが、鼻からの出血が止まらずドクターストップ。3R 2分49秒、前沢がTKO勝ちした



●MA日本ライト級王座決定戦 3分5R (第9試合)  
＜両級1位＞  
○井上 哲(山本ジム所属、60.35"、32歳)  
(判定3-0) ※採点=50:48、50:48、50:49  
●中林 勇人(ビクトリージム所属、61.15"、26歳)  
＜両級2位＞  
※井上が新王者となる

○選手の傍ら、指導でも尽力する井上の王座奪取を関係者が祝福した。スーパーライトと合わせて5度目の王座挑戦で、念願の王座に就いた井上。「ようやくライト級のイテ代表者になったという感覚。機会があれば上にいる強い選手、小野瀬選手、佐藤孝也選手、小林選手、会沢選手と闘ってみたい」と今後への抱負を語った



ベテラン井上哲、5度目の挑戦で、念願の王座奪取!  
○スネーク加藤が返上し、空位のライト級王座をベテランの井上(左)と連戦をしい中林が争った決定戦。ヒジが主武器で、和製切り裂き魔の異名をとる井上だが、「組むのはやめて、力まないように距離を取っての攻撃を心掛けた」と右ローを中心とした、中間距離で攻勢を掛ける。パンチの連打で反撃を試みた中林だが、懐に入ることが出来ず。判定で井上が勝利を飾る結果に終わった